

私立大学研究ブランディング事業 2018（平成30）年度の進捗状況

学校法人番号	131097	学校法人名	立正大学学園		
大学名	立正大学				
事業名	立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト				
申請タイプ	タイプB	支援期間	3年	収容定員	9630人
参画組織	立正大学ウズベキスタン学術調査隊、仏教学部、文学部、地球環境科学部、法華経文化研究所、研究推進・地域連携センター				
事業概要	<p>本事業は、本学の特色を生かした学際的領域の研究事業である。ウズベキスタン研究機関との学術協定に基づき、現地研究者と共同で当地に残る古代仏教遺跡の発掘、保存修復、科学分析を行い、日本への仏教展開過程を明らかにする。そして2015年に発表した共同声明の内容を深化すべく、当地での発見を内外に公表し、研究事業への展開や教育交流など、学術・教育両面での成果を還元することを目指す。</p>				
①事業目的	<p>本事業は、ウズベキスタン共和国科学アカデミー等との協定に基づき、現地研究者と共同で当地に残る古代仏教伽藍址の発掘、保存修復、出土物の整理調査および科学的分析を行い、ユーラシア大陸における仏教文化の展開過程の一端を明らかにすることを主目的としている。また立正大学は日蓮宗の僧侶の教育機関を淵源としており、日蓮の社会貢献への誓いを現代的に言い換えた「正しきを立てて、安穏な社会、平和な世界に寄与しよう」という立正精神を「建学の精神」としている。しかし、現状では本学の独自性や建学の精神について広く認知されているとは言い難く、今後一層の努力と貢献が求められている。そこで、「仏教学・歴史学・考古学・地理学」という創設以来の学問領域に端緒となる課題を置きつつ、8学部15学科からなる総合大学として広く研究者の参画を求めやすく、かつ我が国の研究者にとって未解明な領域を多く含む課題を設定することで、本学の独自性と建学の精神を活かした貢献ができる考えた。ウズベキスタンは旧ソ連の経済圏に属し、かつイスラーム教を国教としているという点では日本の現代社会のあり方とは距離がある一方で、親日国であることから、今後の相互交流や研究によって得られる人脈や知識には双方に新たな可能性を期待できる。</p> <p>【自大学及び外部環境並びに社会情勢等に係る現状・課題の分析内容と研究テーマとの関連】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 仏教への世界的な再注目 ② ユーラシア研究の重要性 ③ 仏教遺跡に関する学術的意義 <p>【大学のブランド(独自色)として打ち出すための研究テーマとしての選択理由】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 世界的な仏教文化遺産の調査・研究を行う機関のひとつとして ② ウズベキスタンの人材育成や調査修復技術の教育に貢献可能な教育機関として ③ すでに実績のある事業を持続的に発展拡大させ、国際貢献する契機として <p>【大学の将来ビジョン】</p> <p>本学の建学の精神は「正しきを立てて、安穏な社会、平和な世界に寄与」することにある。本学の蓄積ある学問を誠実に深めていくことで、我が国の文化や世界のなりたちの一端を解き明かし、世界の人々が希求する平和かつ文化的な交流に貢献する総合大学というイメージを定着させたい。その点ではとくに「人間・社会・地球」という研究分野をカバーする総合大学としての本学のイメージを訴求していきたい。</p>				
②2018（平成30）年度の実施目標及び実施計画	<p>活動計画（2018年度計画提示時に補正した点は※に、追加した部分は〈 〉で表記）</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 未着手未完の実測図の継続作成〈カラ・テベ〉 ② 保存のための恒久的処置を科学アカデミーと協議〈カラ・テベ〉 ③ 出土遺物及び実測図面、写真等の整理作業 〈カラ・テベ〉 ④ 成果報告書作成・公刊作業〈カラ・テベ〉 ⑤ 〈両国研究者によるシンポジウム開催〉 ⑥ ウズベキスタンにおける〈本学研究者による〉講演会開催 ⑦ 〈ズルマラ周辺の地下調査および遺跡の保全に関わる調査〉 ⑧ 〈ニュースレターの刊行〉 ⑨ 〈TV・新聞・Webなどの媒体を利用した広報活動〉 <p>※ 申請書で2019年度に実施予定としていた⑤を前倒して2018年度に行うこととしたほか、プロジェクトを広報する活動を特に強化した。</p>				

<p>③2018（平成30）年度の事業成果</p>	<p>十分な成果が出ていると認められる。特に、学外ブランディングについては、昨年度の計画通り、TV、新聞掲載を通じて十分に学外にアピール出来たと思われる。また、シンポジウムが盛況であったことも、その成功をうかがわせる。さらにウズベキスタン現地調査に本学の大学院生も参加した事は、学内ブランディングに非常に有意義であったと考える。</p> <p>今後も、他大学や公の機関と提携しながら活動することによって、更なるブランディング力の強化が望まれる。</p> <p>本プロジェクトを通じて、本学の在学生・卒業生が母校を誇りに出来るような活動を継続して行くことが肝要であり、学内での自己肯定感を高めていくことも求められる。今後もますます、ウズベキスタンとの文化交流が発展することを期待する。</p>
<p>④2018（平成30）年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(自己点検・評価)</p> <p>カラ・テペ遺跡及びズルマラ仏塔の研究調査は非常に有意義で、研究としての成果は十分である。また今後も「継続的な」調査がおこなわれることは高く評価できる。</p> <p>ブランディングという観点からみても学外への発信力も十分であり、継続して学園と研究の関連性をアピールしていくことが望まれる。</p> <p>ただし、カラ・テペ遺跡に関する目標のうち、数点、到達不十分なものがあることや学内への発信力は必ずしも十分ではない点など、更なる向上が望まれる。</p> <p>(外部評価)</p> <p>事業全体として、ズルマラ仏塔のレーザー探査を行うなど、調査は有意義である。ウズベキスタン本国の研究者と連携し、さらなる共同研究が望まれる。</p> <p>ブランディングという観点からみても、各種メディアを通じて積極的に活動しており、学内・学外へのアピールは十分達成されているものと思われる。</p> <p>文科省のブランディング事業としては次年度で最後となるが、立正大学がこの事業を継続し、両国の文化交流の発展に寄与されることを望む。</p>
<p>⑤2018（平成30）年度の補助金の使用状況</p>	<p>研究費は主として、ズルマラ仏塔の発掘調査および、国際シンポジウム開催、刊行物発行に使用された。仏塔調査では、ドローンを用いることで仏塔の現状を調査し、今後の活動方針の指針となった。また、ウズベキスタン本国より、研究者を招聘し講演を行うことで、一般来場者にも本プロジェクトの活動を大いに周知することができた。以上を踏まえた上で、補助金の使用状況については、外部評価委員4名より、適正との評価を受けた。尚、総事業経費29,637,381円のうち、現地活動費用は8,572,457円、国際シンポジウム経費は4,584,016円、刊行物発行は3,682,578円であった。</p>